

# ポートフォリオを活用した反省的实践家としての 小学校英語教員養成プログラムの効果

北 條 礼 子\*・松 崎 邦 守\*\*  
(平成23年 9 月30日受付；平成23年11月16日受理)

## 要 旨

平成23年度より全国公立小学校において外国語活動（英語）が必修化され、主な担い手は学級担任である。しかし現在でも小学校教員対象の研修は不十分な状況にあり、外国語活動を担当できる教員養成も急務である。2009年10月から2010年3月にかけて、本研究に先立つポートフォリオを活用した反省的实践家としての小学校英語教員養成プログラムの実施の結果に修正を加えた同様のプログラムを実施した。学部生、大学院生計21名が参加したが、同プログラムは参加者から好意的な評価を得た。

## KEY WORDS

portfolio ポートフォリオ      reflective practitioner 反省的实践家  
teacher training 教員養成      guest teacher activity 出張授業      GT ゲスト・ティーチャー  
foreign language activities at elementary school 小学校外国語活動

## 1. 研究の背景：

### 1.1 小学校外国語活動（英語）の現状

文部科学省は2008年3月に新学習指導要領を告示し、外国語活動は2011（平成23）年度より「総合的な学習の時間」から独立し、全国公立小学校の5・6年生において週1回年間35回程度必修化された。小学校外国語活動は主に学級担任が担当することが求められており、この分野での教員養成は急務となっている。

### 1.2 これまでの出張授業の経緯

2006年秋から筆者が中心となり、大学院生、学部生、研究生を構成メンバーとする、チーム・ティーチング（TT）形式の外国語活動の出張授業を本学附属小学校の協力の基、同校において実施してきた。2006年度は3年生1学級で出張授業を試行し、2007年度には3年生全2学級を対象に実施することになった。この2年間は初期の文字指導を扱い、アルファベットの大文字・小文字の読み方とアルファベットのフォニックス読みの学習を行った。

2008年度からは、例年10月から翌年3月にかけて、3、4年生全4学級において30分のモジュール授業約10回を出張授業として実施した。小学校英語活動のねらいはコミュニケーション能力の素地を作ることとされているが、附属小学校では当時年間20時間程度の英語活動が行われていた。コミュニケーション活動は附属小学校が主に担当し、この活動を補完する文字学習活動として、大学からの出張授業を実施した。2008年度は中学年対象の英語の文字学習を中心とした。2007年度と同様に、3年生ではアルファベットの大文字・小文字の読み方とそのフォニックス読みの学習を実施した。留意点として、3年生にとってこのような文字学習が退屈なものにならないように、ドリルの部分にゲーム性を持たせたカルタなどのカードゲームやピコピコハンマーゲームなどを取り入れた。4年生では、前年度のアルファベット大文字・小文字の読み方とそのフォニックス読みの学習の継続として、一歩進んだフォニックスの基本的規則を扱った。試行的な学習であるため、4年生児童の理解の状態を把握しながら、「サイレントe（マジックe）」から開始し、あせることなくゆっくり学習を進めた。附属小学校の英会話の担当教諭から、4年生児童は読める英単語が増えてきている傾向がみられるとの感想が寄せられた。さらに、2009年2月から1、2年生においてもアルファベットを扱い、1年生でアルファベットの大文字の読み方、2年生では小文字の読み方の学習を行った。5年生ではフォニックスの規則をいくつか扱った。

### 1.3 小学校外国語活動（英語）における反省的实践家の養成とポートフォリオ活用

近年、教師教育において、反省的实践家の養成（佐藤，1996）が必要であるとの指摘がなされている。反省的实践家（reflective practitioner）とはSchön（1983）が「反省的实践家—専門家は実践過程でどう思考しているか」で提起した概念であり、佐藤（1996）は、「技術的实践志向」から「反省的实践」をモデルとする教師教育が求められな

ればならないと述べている。反省的实践家としての教師の養成を具現化するための手段であるが、ポートフォリオの作成過程に様々な内省活動が内在する（Klenowski, 2002）ことから、ポートフォリオがそのための有力な手立の一つであると考えられる。また、ゲスト・ティーチャー（Guest Teacher: 以下GT）が行う出張授業（以下GT活動）において、内省活動を重視するポートフォリオという手法を用いることにより、小学校英語分野での教員養成における反省的实践家への態度養成に大なる効果が期待できることが確認されている（北條・松崎, 2006）。

本研究では、GTポートフォリオを、「明確なガイドラインに沿って実習の成果を収集し、その成果に基づき内省や選択、コミュニケーションおよび形式的に評価を行いながら、教師としての成長を促し、小学校英語活動指導への意欲を高めるための目的付き実習ファイル」と定義づける。

## 2. 研究の目的：

本研究の目的は、前回試行した小学校英語教育における反省的实践家養成のための養成プログラムを改善した上で実施し、その効果を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法：

### 3.1 実験実施時期：2009年10月～2010年3月

### 3.2 対象者：教員養成系J大学学部生・大学院生計21名

### 3.3 測定具：

- ①ポートフォリオを活用した教員養成プログラムに関する5段階尺度形式35項目  
（この35項目にはプログラム全体への評価項目であるARCS動機づけモデルに基づく6項目が含まれている）
- ②全体カンファレンスにおける自由記述式の最終的なGT授業に対するコメント

### 3.4 教員養成プログラムの留意点：

設計上の留意点として、これまで実践してきた以下の4つの活動を組み入れた。

- ①ガイドラインの事前明示
- ②ゴールカードの実施
- ③カンファレンスの実施などのポートフォリオ作成過程での重要な活動
- ④仲間との学び合いの活動

前回の研究からの改善点は、以下の2点であった。

- ①参加人数を増やすこと（先回は）14名であったが、今回は21名）
- ②出張授業直後にカンファレンスを必ず実施すること

### 3.5 出張授業の手順：

2009年度の指導目標は筆者が附属小学校と相談の上、決定し、担当学生に伝えた。参加学生は、3～6年生計8学級にわかれて担当した。担当学級ごとに大まかには、まず月曜日に指導案を指導者（筆者）に内容を確認の上で作成し、GT授業の個々の学習活動に関する役割分担をした。次に、火曜日から木曜日にかけて必要な教具を作成し、授業のリハーサルを実施し、金曜日の授業に出かけるというルーティンをこなした。指導案はGT授業当日に参観者全員に配布し、欠席者にはカンファレンス（反省会）の時間に配布した。カンファレンスは授業実施直後に参加学生全員により実施した。また、金曜日に実施したGT活動はすべてビデオに録画した上、速やかにDVDを作成し、希望者は自分達の授業の様子をみて次回の授業の参考にした。1、2年生の授業は3～6年生の授業終了後3度実施したが、希望する学生が授業者となり、同様のルーティンにより実施された。最終的に、全GT活動終了後、全GT活動を振り返る全体カンファレンスを実施した。

### 3.6 分析方法：直接確率計算

## 4. 研究の結果と考察：

### 4.1 ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対するARCS動機づけモデルによる6項目について

#### 4.1.1 ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対するARCS動機づけモデルによる6項目の平均（M）と標準偏差（SD）

まず、ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対する評価を得るためのARCS動機づけモデルによる6項目の平均と標準偏差は表1に示すとおりである。この6項目は5点満点であるが、平均は4.29～4.76を推移しており、6項目すべてが4.00以上であった。ここから、同プログラムの参加者は同プログラムを大変好意的に評価していたといえる。

表1 ARCS動機づけモデルによる6項目の平均(M)と標準偏差(SD)(N=21)

項 目 内 容:		M	SD
GT活動を振り返ると全体として			
1	おもしろかった	4.76	.44
2	やりがいがあった	4.76	.44
3	自分に自信がついた	4.29	.56
4	満足感が得られた	4.52	.51
5	またやってみたい	4.71	.46
6	他の人にも勧めてみたい	4.76	.44

#### 4.1.2 ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対するARCS動機づけモデルによる6項目の分散分析結果

ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対する評価を得るためのARCS動機づけモデルによる6項目について、分散分析を行った結果、1%レベルで有意であった( $F(5,100)=4.66^{**}$ )。LSD法による多重比較を実施したが、自信に関する項目が注意、適切性より平均が低く、5%レベルで有意差がみられた( $MS_e=.17, p<.05$ )。さらにARCS動機づけモデルに加えた自信に関する項目は再度挑戦、勧誘という側面より平均が低く、5%レベルで有意差がみられた( $MS_e=.17, p<.05$ )。

#### 4.1.3 ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対するARCS動機づけモデルによる6項目の頻度数の集計結果と母比率不等直接確率計算結果

次に、全6項目について5段階尺度形式を3段階に計算し再集計した結果は、項目3のみ中立の回答が1名あったが、他の5項目においてはすべて肯定的な回答が21名であり、中立ならびに否定的な回答はなかった。母比率不等の直接確率計算の結果は表2に示すとおりであるが、全6項目において1%レベルで肯定的な回答が中立と否定的な回答の合計数より多かった。ここから、本研究における小学校外国語活動を担当する教員養成プログラムは、ARCS動機づけモデルによる「Attention（注意）」、「Relevance（適切性）」、「Confidence（自信）」、「Satisfaction（満足感）」の4つの側面と再度挑戦、勧誘というすべてにおいて参加者全員から肯定的な評価を得たことが明らかになった。

表2 ARCS動機づけモデルによる6項目の集計結果と直接確率計算の結果(N=21)

項 目 内 容:	集計結果			(肯定) vs (中立+否定) の回答に対する 母比率不等直接確率計算結果	
	肯定	中立	否定	p	比 較 結 果
GT活動を振り返ると全体として					
1 おもしろかった	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
2 やりがいがあった	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
3 自分に自信がついた	20	1	0	.00**	肯定>中立+否定
4 満足感が得られた	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
5 またやってみたい	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
6 他の人にも勧めてみたい	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定

\*\* $p<.01$ 

#### 4.1.4 ポートフォリオを活用した教員養成プログラム全体に対するARCS動機づけモデルによる6項目に関する自由記述

ARCS動機づけモデルによる4項目は、動機づけを「Attention（注意）」、「Relevance（適切性）」、「Confidence（自信）」、「Satisfaction（満足感）」という4つの側面から捉えている。本研究では、この4側面に関連づけて、GT活動に関する感想を、自由記述として参加者から得た。主なものは以下のとおりである。内容をみると、GT活動の「やりがい」や「自信」に関するものが多かった。「満足感」ということばは自由記述にはみられなかった。

##### ①Attention（注意）の側面：「おもしろかった」

- ・生の児童の反応や生長を見ることができておもしろかった。

##### ②Relevance（適切性）の側面：「やりがいがあった」

- ・デジタル教材の作成に力を入れていたので、子どもたちに喜んでもらえると教材作成がおもしろくなり、やりがいをかんじるようになった。
- ・どうすれば次回で改善できるか、内容を考えることにやりがいを感じた。
- ・チャンツや単語練習では、リズムのテンポを早くしてほしいという子どもの意欲が感じられてとてもやりがい

のある活動ができたと思います。

- ・とてもやりがいがあり、勉強になることがたくさんありました。
- ・まず第一に、とてもやりがいのある活動であったと思う。
- ・準備や練習してきたことがうまくいったり、それを子どもたちがよろこんでくれたとき、とてもやりがいを感じました。

③Confidence（自信）の側面：「自信がついた」

- ・何度も授業を繰り返すうちに自然と自信になった。
- ・今でも緊張はしますが、それを乗り越え自信になったと思います。
- ・他の人の授業を見る中で、自分の指導を振り返る良い機会となった。前年よりも成長しているなど思えたので、少し自信がついたような気がします。
- ・全く小学校英語に触れていない人より自信がついたと思う。
- ・児童の前に立って堂々と授業を行えるようになってきたので、だんだんと自分が英語を教えることに対して自信がついてきました。

4.2 ポートフォリオの有効性に関する26項目について

4.2.1 ポートフォリオの有効性に関する26項目の平均（M）と標準偏差（SD）

次にポートフォリオの有効性に対する26項目の回答の平均（M）と標準偏差（SD）は表3に示すとおりである。  
表3から、全26項目の平均は3.43から4.95を推移していた。

表3 ポートフォリオの有効性に対する項目の平均と標準偏差（SD）（N=21）

番号	項 目 内 容	M	SD
1	GT授業は自分の反省的实践力向上に有効	4.62	.50
2	GT授業は英語力を高めるのに有効	4.24	.54
3	GT授業は自分の研究への意欲向上に有効	4.14	.91
4	GT授業は教職への意識向上に有効	4.76	.44
5	GT授業はゼミの仲間関係づくりに有効	4.71	.46
6	PFはGT授業へのやる気向上に有効	3.86	.65
7	PFはGT授業の成果収集に有効	4.10	.77
8	PFはGT授業の振り返りに有効	4.38	.50
9	PFはGT授業改善に有効	4.24	.70
10	PFはGT授業への不安を軽減に有効	3.43	.75
11	ガイドラインはGT授業の見通しに有効	3.57	.68
12	ガイドラインはGT授業へのやる気向上に有効	3.76	.62
13	授業後CはGT授業へのやる気向上に有効	4.67	.58
14	授業後CはGT授業の振り返りに有効	4.95	.22
15	授業後CはGT授業改善に有効	4.90	.30
16	授業後はGT授業の仲間との学び合いに有効	4.76	.44
17	授業後CはGT授業への不安軽減に有効	4.24	.94
18	全体CはGT授業へのやる気向上に有効	4.48	.60
19	全体CはGT授業の振り返りに有効	4.71	.46
20	全体CはGT授業改善に有効	4.71	.46
21	全体CはGT授業の仲間との学び合いに有効	4.62	.50
22	全体CはGT授業への不安軽減に有効	3.95	.92
23	GT授業に対し仲間との準備は有効	4.86	.36
24	3～4人のグループによる指導体制は有効	4.81	.40
25	先輩のGT授業のDVDは参考になった	4.38	.67
26	GT授業後の速やかなDVD配布は有効	4.48	.60

(注) PF：ポートフォリオ，C：カンファレンス

4.2.2 ポートフォリオの有効性に関する26項目の分散分析結果

次にポートフォリオの有効性に対する26項目の回答について分散分析を行ったが、1%レベルで有意であった（ $F(25,500)=11.51^{**}$ ）。LSD法による多重比較を実施したが、少なくとも上位6項目と下位6項目は5%レベルで有意差がみられた（ $MSe=.32, p<.05$ ）。

以上の結果に基づき、平均の高い6項目をみると、項目14「授業後のカンファレンスはGT授業へのやる気の向上に有効 ( $M=4.95$ ,  $SD=.22$ )」、項目15「授業後のカンファレンスはGT授業の改善に有効 ( $M=4.90$ ,  $SD=.30$ )」、項目23「GT授業に対し仲間との準備は有効 ( $M=4.86$ ,  $SD=.36$ )」、項目24「3～4人のグループによる指導体制は有効 ( $M=4.81$ ,  $SD=.40$ )」、項目4「GT授業は教職への意識向上に有効 ( $M=4.76$ ,  $SD=.44$ )」、項目16「授業後のカンファレンスはGT授業の仲間との学び合いに有効 ( $M=4.76$ ,  $SD=.44$ )」であった。以上から、参加者は授業後のカンファレンスがGT授業に対するやる気の向上、GT授業の改善、GT授業の仲間との学び合いに有効であると高く評価していること、またGT授業について仲間との準備が有効であり、GT授業が教職への意識を向上させることに有効であること、さらに3～4人のグループによるチームティーチングという指導体制が有効であることが高い評価を受けていることがわかった。

一方、平均の低い5項目をみると、項目10「ポートフォリオはGT授業への不安を軽減に有効 ( $M=3.43$ ,  $SD=.75$ )」、項目11「ガイドラインはGT授業の見通しに有効 ( $M=3.57$ ,  $SD=.68$ )」、項目12「ガイドラインはGT授業へのやる気向上に有効 ( $M=3.76$ ,  $SD=.62$ )」、項目6「ポートフォリオはGT授業へのやる気向上に有効 ( $M=3.86$ ,  $SD=.65$ )」、項目22「全体カンファレンスはGT授業への不安軽減に有効 ( $M=3.95$ ,  $SD=.92$ )」であった。以上から、ポートフォリオや全体カンファレンスはGT授業への不安軽減に必ずしも大変効果的であるとはいえないこと、ガイドラインやポートフォリオはGT授業へのやる気の向上に必ずしも大変有効とはいえないこと、ガイドラインはGT授業の見通しにどちらかというと大変有効であるとはいえないことが示された。ここから、ポートフォリオそのものやガイドラインの役割が参加者に強く意識されていないことが明らかになった。

表4 ポートフォリオの有効性に対する項目の集計結果と母比率不等直接確率計算結果 ( $N=21$ )

項 目 内 容:		肯定	中立	否定	(肯定) vs (中立+否定) の回答に対する母比率不等直接確率計算結果	
GT活動を振り返ると全体として					<i>p</i>	比 較 結 果
1	GT授業は自分の反省的実践力向上に有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
2	GT授業は英語力を高めるのに有効	20	1	0	.00**	肯定>中立+否定
3	GT授業は自分の研究への意欲向上に有効	16	4	1	.00**	肯定>中立+否定
4	GT授業は教職への意識向上に有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
5	GT授業はゼミの仲間関係づくり有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
6	PFはGT授業へのやる気向上に有効	17	3	1	.00**	肯定>中立+否定
7	PFはGT授業の成果収集に有効	18	2	1	.00**	肯定>中立+否定
8	PFはGT授業の振り返りに有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
9	PFはGT授業改善に有効	20	1	0	.00**	肯定>中立+否定
10	PFはGT授業への不安を軽減するのに有効	12	6	3	.02*	肯定>中立+否定
11	ガイドラインはGT授業の見通しに有効	12	8	1	.02*	肯定>中立+否定
12	ガイドラインはGT授業へのやる気向上に有効	14	7	0	.00**	肯定>中立+否定
13	授業後CはGT授業へのやる気向上に有効	20	1	0	.00**	肯定>中立+否定
14	授業後CはGT授業の振り返りに有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
15	授業後CはGT授業改善に有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
16	授業CはGT授業の仲間との学び合いに有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
17	授業後CはGT授業への不安軽減に有効	18	1	2	.00**	肯定>中立+否定
18	全体CはGT授業へのやる気向上に有効	20	1	0	.00**	肯定>中立+否定
19	全体CはGT授業の振り返りに有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
20	全体CはGT授業改善に有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
21	全体CはGT授業の仲間との学び合いに有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
22	全体CはGT授業への不安軽減に有効	16	3	2	.00**	肯定>中立+否定
23	GT授業に対し仲間との準備は有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
24	3～4人のグループによる指導体制は有効	21	0	0	.00**	肯定>中立+否定
25	先輩のGT授業のDVDは参考になった	19	2	0	.00**	肯定>中立+否定
26	GT授業後の速やかなDVD配布は有効	20	1	0	.00**	肯定>中立+否定

\*\* $p<.05$     \*\* $p<.01$



#### 4.2.3 ポートフォリオの有効性に関する26項目の頻度数の集計結果と母比率不等直接確率計算結果

次に、全26項目について5段階尺度形式での回答の頻度数を3段階尺度（1と2を否定、3を中立、4と5を肯定）に再計算した。さらに肯定的な回答と中立ならびに否定的な回答の合計数について母比率不等の直接確率計算を行った。頻度数の再集計結果と母比率不等直接確率計算結果は表4に示すとおりである。

表4をみると、まず、項目10「ポートフォリオはGT授業への不安を軽減するのに有効」、項目11「ガイドラインはGT授業の見通しに有効」において5%レベルで肯定的回答数が中立の回答と否定的回答の合計数より多かった。さらに、他の24目において1%レベルで肯定的回答数が中立の回答と否定的回答の合計数より多かった。ここから、以上の26項目はすべて有意に肯定的回答数が多かったことが確認された。

#### 4.2.4 ポートフォリオに関する自由記述

ポートフォリオの有効性についても参加者から自由記述の形式で感想を得た。感想の内容をみると、カンファレンスに関するものが最も多かった。

##### ①カンファレンスの有効性について

- ・全体カンファレンスで自分以外の視点や気づきを知ることができ、自分と同じ意見で共感できたのが良かった。
- ・カンファレンスは、自分の授業を客観視する手助けになった。普段になかなかできないことなので貴重であった。
- ・授業後カンファレンスは、客観的GT活動を振り返ることにより、仲間同士で改善点を共有し、より良い授業作りへの意識を高めることができました。
- ・カンファレンスを通して、先輩や先生方からアドバイスをもらうことができ、次の授業に生かし、より良いものにすることができた。
- ・授業後カンファレンスや全体カンファレンスにおいて、自分やグループの実践を振り返ることができ、反省的実践力を高める点で有効な活動であったと思う。
- ・カンファレンスでは、自分の気がつけなかったことや、次の授業につながるアドバイスを聞くことができるなど、GT授業をするうえで大変役に立った。カンファレンスで話しあうことで、グループの仲間と深く話しあい、授業作りを協力していいものにしていこうという意識が生まれた。
- ・GT活動のカンファレンスで他の学年、あるいは同じ学年の人達から反省点や良かったことを共有でき、それが自分達の次の活動にもつながることが何度もあり、本当に充実していたと思います。
- ・私の中では授業後のカンファレンスがとても有効だったなと強くおもっています。授業をしてその日のうちに自分の活動を具体的にしっかりと振り返ることができ、自分たちがやっている中では分からない所を観察していた方に指摘していただくことで次の活動に役立てることもできました。
- ・授業後カンファレンスについてですが、自分は授業をした後反省したり自信がなくなったことが多々あったのですが、みなさんも同じように不安を抱えたり反省されていることが分かって安心しましたし、みなさんの反省から学ぶことも多々ありました。
- ・自分のその日の授業を忘れないうちに反省できたのがよかった。自己満足で終わらずに済んだ。自分を客観的に見ると苦しいが、自分のために良かった。

##### ②カンファレンスの工夫点について

- ・授業後カンファレンスで一人一人発表するよりもグループで話し合う方がより深まるのではないかと感じます。

##### ③3～4名のチームティーチングについて

- ・一人で授業を行うよりも不安が軽くなるし、仕事も分担できて、仲間の関係作りが上手くいった。
- ・グループによる指導体制は、お互いの活動の良い点、改善点を話し合える点でとても良かったです。3年生は昨年度のDVDを参考にして活動を組み立てていったのですが、活動回数をかさねる中で、自分たちのチームならではの変更や工夫をもっとできたら良かったと思います。
- ・3～4人でのグループによる活動も1人当たりの負担が少なくて済むしグループ内の人たちとの交流のできるとてもいいやり方だったと思います。
- ・グループで行うGT授業は、個人の負担が軽減されるだけでなく、アイデアが豊かな授業を実践できる大変貴重な機会である。現場の公立小学校ではALTやJTEとTTをすることが頻繁にあるので、その模擬実習にもなる。

## ④ポートフォリオそのものについて

- ・昨年度の少人数によるポートフォリオ，個人カンファレンスを経験していたため（難しいとは思いますが）毎回の実践後により少人数かつガイドラインに徹底したカンファレンスが出来たら，よりポートフォリオの良さが実感できるように思いました。
- ・まだまだポートフォリオ，ガイドラインを有効に使えていないので，ガイドラインでたまに振り返ってみて自分の反省やこれからの目標を意識していきたい。
- ・ただ単にGT授業をするだけではなくて，記録として残す（毎回GT授業記録をしていた）ことで，自分の反省点や次回やりたいことが明確になって次回の授業に挑戦することができたことがよかった。

## ⑤英語力について

- ・英語力に関してですが，学部4年生になり卒論に取り組んでいる最中は英語にふれる機会が少なかったのでGT授業で英語を話す機会が増えたのがとても良かったです。

## 5. 今後の課題

本研究の教員養成プログラムは参加者から大変高い評価を受けた。特に，カンファレンスについてはその有効性が強く認められた。ただし，本研究において授業後カンファレンスは毎回参加者一人一人が反省点を述べる形式で行われた。参加者から，まず出張授業の担当学年ごとのグループで反省を行い，その後全体でのカンファレンスに臨む方がよいのではないかと意見があった。この点を修正点として，さらに同プログラムの効果を確認していく予定である。

## 引用・参考文献

- ベネッセコーポレーション校英語に関する基本調査（教員調査）第2部 第1章 第1節英語活動の実態」. 2011年9月1日検索. [http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo\\_eigo/2006/pdf/data\\_07.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/pdf/data_07.pdf)
- Curtain, H., & Pesola, C.A. (1994). *Languages and children: Making the match* (2nd ed). White Plains, NY: Longman. (伊藤克敏ほか(編).『児童外国語教育ハンドブック』. 東京: 研究社, 2005).
- 樋口忠彦他編. (2005). 「これからの小学校英語教育—理論と実践—」. 東京: 研究社.
- 長谷川信子. (1997). 『第3章小学校からの外国語教育』. 樋口忠彦編. 東京: 研究社出版株式会社.
- 北條礼子・松崎邦守. (2006). 「ポートフォリオを活用した大学生ゲスト・ティーチャー (GT) による英語活動の試み—反省的実践家養成を目指して—」. 『小学校英語教育学会紀要』. 第6号. 43-48.
- 北條礼子・大田亜紀. (2009). 「幼稚園児・小学生の知的好奇心を刺激する英語教育の学習プログラムの構築」. 『教育実践研究』. 第19集. 19-26.
- 北條礼子・君 佳子. (2010). 「文字指導を中心とした小学校英語活動の試み」. 『教育実践研究』. 第20集. 19-26.
- 北條礼子. (2010). 「ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの設計と試行」. 上越教育大学紀要 第29巻.
- 北條礼子・君 佳子. (2011). 「小学校英語活動における文字指導の試み」. 『教育実践研究』. 第21集. 1-8.
- Klenowski, V. (2002). *Developing Portfolios for Learning and Assessment: Processes and Principles*. London: Routledge Falmer.
- 松川禮子 (編著). 『小学校英語活動を創る』. 東京: 高陵社書店.
- 松川禮子. (2004). 『明日の小学校英語教育を拓く』. 東京: アプリコット.
- 文部科学省. (2001). 『小学校英語活動実践の手引き』. 東京: 開隆堂.
- 文部科学省. (2008). 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」. 東京: 東洋館出版社.
- 文部科学省. (2009). 『英語ノート1 完全対応指導ハンドブック1』. 『英語ノート2 完全対応指導ハンドブック2』. 東京: 開隆堂.
- 文部科学省. (2009). 「教育課程の編成・実施状況調査」. 2011年9月12日検索. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1263169.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1263169.htm)
- 中山兼芳編. (2001). 『児童英語教育を学ぶ人のために』. 京都: 世界思想社.
- 野呂忠司. (2007). 「小中連携と文字指導」『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携—』. (松川禮子・大下邦幸編著). 東京: 高陵社書店. 102-118.
- 旺文社英語教育研究室. (2009). 「小学校の英語活動に関するアンケート調査結果報告」. 『週刊教育資料』. 東京: 教育公論社. 42-50.
- 佐藤 学. (1996). 『教育方法学』. 東京: 岩波書店.
- Schön, D. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. NY: Basic Books.

# The Effects of a Program of Nurturing Reflectiveness: The Portfolios of Student-Teachers of English at Elementary Schools

Reiko HOJO\* • Kunimori MATSUZAKI\*\*

## ABSTRACT

In April of 2011, foreign language (English in principle) activities were formally introduced into all the public elementary schools in Japan. These have mainly been conducted by homeroom teachers. In order to enhance the English activities, it is crucial to nurture English teachers who could be responsible for the activities as well as conduct English training courses for elementary school teachers.

From October in 2009 to March in 2010, 21 university students and graduate school students of our University participated in an improved project based on the results of one conducted as a trial project. These projects have utilized portfolios which aim to nurture student-teachers' reflective attitudes toward teaching. Data was obtained through a questionnaire and the student-teachers' comments at a conference held at the end of the project. The results of the questionnaire revealed that the project utilizing the portfolios was highly evaluated by the participants. Also, the comments supported the results.

---

\* Humanities and Social Studies Education

\*\* Hokkaido University of Education